吉田町（よしだちょう）

村の生まれ南北朝時代

畝傍山の西南ふもとにある「吉田」は、南北朝時代（一三三四―）すでに生まれていたようです。

至徳三（一三八六）年の文書に興福寺関係領地「吉田郷」として登場しています。時代が下った室町時代の後期（一四七八―）になると地名に「越智郷」の表記が加わります。土地の豪族越智氏の支配下に入ったことが分かります。

江戸時代に「吉田村」と呼ばれた当地は、旗本・神保氏の知行地となり幕末を迎えています。同時代の寛文―元禄（一六六一―一七〇三）年間に当村から、古川坊城村（現在の古川・東坊城町）が分村・独立しています。

明治一五年ごろの吉田村は、戸数一九・人口一二六の農村（町村誌集）でした。同一七年の主産物は米・裸麦・ぶどう・実綿・菜種など（農産物取調表）でした。

明治二二年に白橿村の大字となったあと昭和三年に畝傍町の大字になり、さらに昭和三一年の橿原市発足で現在の「吉田町」となりました。

当町の鎮守「安寧天皇神社」が、畝傍山から伸びる丘陵上に鎮座しています。古い記録（高市郡神社誌）には、同神社が安寧天皇「御廟所なるべし」とあります。